

シンポジウム「中学生転落死問題から見つめ直す …今、そしてこれからの学校と教育」に参加して

鬼頭 正和(所員)

2014年2月22日、愛知県教職員労働組合協議会(愛教労)主催のシンポジウム「中学生転落死問題から見つめ直す…今、そしてこれからの学校と教育」が開催された。私は、このシンポジウムには主催者の一員として関わってきた。このシンポの概要を紹介したい。

これは、2013年7月に起こった名古屋市の中学生転落死事件を考えるとともに、テーマにもある通り、中学校の教育をはじめとして、現在の学校と教育のあり方を考え合おうという趣旨で行われた。参加者は、120名ほどであった。

◆愛教労としての報告・提言

最初に、愛教労の「中学生転落死問題に関する報告・提言」があった。独自の調査・聞き取りなどにより、この転落死は、「精神的に追い詰められたことによる自死ではないか」という見解が示された。自死した要因として考えられるのは、①「死ぬ」と言われていたなどいじめがあり、“いじられキャラ”であった。②学校での「強い指導」があった。③思春期特有の深刻な悩み・不安定さがあった。の3点を挙げた。

そして、これらの問題が当該の中学校だけの問題ではなく、小学校も含めて、現在の学校が持つ問題であるとの提起がなされた。

◆3人の問題提起

その後、藤井啓之さんがコーディネーターとなってシンポが進められた。まず、3人のシンポジストからの問題提起があった。

大学生0さんは、小学校5年から高校3年までの8年間に渡っていじめられていた辛かった経験を語ってくれた。「いじめは、うつぶんのはけ口。」「中学校の時は、169人对1人のように感じていた。」「誰にも相談しなかった。」「大学への進学で過去を無理やり断ち切るしか、いじめ

から逃れられなかった。しかし、それは最終手段。」「教師は無力。」「教師は当事者に直接関わろうとしがちだが、周りの傍観者に働きかけないといけない。」「解決するのは子どもたち自身。教師ができるのは“援助”。」などの言葉があった。

定時制通信制父母の会の永野さんは、親の立場から我が子が受けた「記憶がとぶほどの辛い」いじめ、非情な学校の対応、同じ親であるPTA役員などから受けた排他的な仕打ちなどを具体的に語られた。息子さんの「リスペクトがないんだよ。もっと尊重しろよ。」という言葉が印象的だった。大阪から転居されて来て永野さんが感じられた「愛知県への違和感」を深く受け止める必要があるように思った。

3人目の岩澤さんは、中学校教師・生徒指導担当の立場から、実際にあったいじめの事例を話した。その中で心に残ったのは、教職員集団としての対応であった。いじめの事実を把握する上での養護教諭の役割、「いじめかどうか認定することではない・今の状態を止めさせよう・生徒たちの中にある一方的な人間関係を作り変えよう」という共通意識での一致した対応、一日全部の授業をストップしての聴き取り・学年集会という決断、などに、いじめを許さない教師の本気度を感じた。同時に、部活動などで縛られ長時間労働を強いられている教師の一日の生活も紹介され、なぜ教師が相談の窓口にならないのか、その苦渋の思いも語られた。

◆討論 出された主な意見

休憩後、討論に入った。全部は紹介できないが、いくつかの発言を紹介したい。(発言はそのままでなく、筆者がまとめたもので、発言者の意図を正確に反映していない点もあるかもしれない。)

*いじめは、加害者が冗談としてじゃれている。それでエスカレートしていつてしまう。被害者は笑うしかない。遊びでやっているいじめを、どこで歯止めをかけるかが現在のいじめの課題である。

*「非行」の子どもに話を聴くと、「加害者」と言われる彼らは、ほとんど100%がいじめの「被害者」でもあった。「加害者」「被害者」という分け方は適していない。いじめの対象が回っていく。そういう形でしか人間関係が作れないことが問題である。失敗・いじめも含めて、そういう経験をしながら成長していく存在であるという“こども観”を持つことが重要ではないか。

*いじめがLINEなどの形で見えにくくなっている。

*LINEなどは文字として残るので、かえって見えやすいのではないか。

*子どもが本当はどうしてほしいのか本音を聴くことがとても難しい。教師の方に「余裕」があると、「問題」の子が寄って来る。

*「教師には見えない」では済まされない。子どもたちが外に出してくるサインは必ずある。それをキャッチする側の感度が問われている。

*いじめの対象が回っていくこと背景には、“仲間を作りたい”という気持ちがある。その裏面として“排除”していく。「みんな一緒・みんな同じ」というのが問題である。子どものいろいろな面を認め、自己肯定感を育むことが大切ではないか。

*教師が「何人公立高校に入れたか」を自分の評価だと思っている。入試体制が問題である。「競争に負けたヤツは、だめなヤツ」と思っている大学生も多い。

*「勉強ができない＝だめな子」という方程式を崩すためにも、子どもを深く理解するためにも、部活動は必要ではないか。

*部活は、勝利至上主義に走るところに困難が生じる。

*何ができたか・できないかという到達目標で見ていると、子どもたちは苦しくなる。

*当該校のM中学校の施錠開錠記録（資料）を見てほしい。ほとんどが午前0時前後。担任教諭の5月の時間外労働も、115時間を超えている。

*自分も中学校教師だが、このM中の実態は普通である。大部分が異常なのだ。自分も、毎月150時間以上の時間外労働をせざるをえない状況である。本当に忙しくて、生徒の話をじっくりと聴くことができない。「体育館シューズがなくなった。」と訴えてきた生徒がいたが、自分は生徒会の仕事が忙しくて、きちんと対応できなかった。生徒が「学校の先生になりたい」と言ってきた時に、素直に「いいね!」と言えない自分が情けない。今の学校は、ブラックだ。

*教師は、校則などで自分の首を自分で絞めてはいないか。校則で形を整えるが、本当に子ども心に届いている指導をしているだろうか？

*教員の健康問題が深刻である。自分も心を病んだことがある。社会全体の中で労働者の権利をしっかりと守って、若者が希望を持てる社会にしないといけない。労働組合にしっかりとしてほしい。

*教師はやっぱり授業で勝負していくことが大切。「いじめのない学級」は無理だが、「いじめを許さない学級」なら作れる。楽しい授業をクラスで共有することによって、いじめに立ち向かっていきたい。

*報告や討論では、自殺した子の親の様子が見えてこない。教員が責任をかぶっている面があるのではないか。

*小中学校の情報交換の現状。

*様々な調査活動やこのシンポの開催など、教職員労働組合として取り組んでいること自体が意義深い。この事件から何を汲み取るのか、個別の問題に留めず、複合的・構造的に問題をとらえないといけない。検証委員会の報告が3月下旬に出る予定。注目していきたい。

*安倍内閣は、いじめを口実に、教師・教育委員会の責任を問い、「道徳の教科化」「いじめ防止法」「規範意識」などを押しつけてきている。「安倍教育再生」こそ問題にすべき。

◆シンポジストの発言

この討論を受けて、3人のシンポジストからの発言があった。

学生0さんから「自分は、今、教師を目指して大学で勉強している。子どもからの視線を大事にして、教員は忙しいが、やれることが何かあるはず。子どもをどう見ていくかを大事にした。」という力強い発言がなされて、胸が熱くなった。

永野さんの「学校信仰を捨てよう。学校の言うがままの親だと、子どものサインが見えない。学校や教員が何もかも請け負う必要はない。地域と学校が協力しないといけない。」という経験に基づいた発言は重みがあった。

岩澤さんは、「『強い指導』は実際にあるが、ルールをゴリゴリに押しつけることを見直したい。」「ルールは大切だが、不合理なルールでなく、意味のあるルールが大切。」「ルール・校則不要論は間違い。ゼロトレランスはだめだが、バランスが大事だと思う。」「中学校の教員は、中学校に裏社会の文化が入り込み（暴力団やシンナー等）、子どもが破壊されていくことを恐れている。」などと発言した。

◆私の感想

最後に筆者の感想を述べたい。

①こういったシンポジウムの討論の難しさである。今回の転落死事件そのものを検証するには様々な制約が多すぎて、原因はこれである、問題点はこれである、などと断定することはとてもできない。

②中学校教員の置かれている実態が、当該校の教員の勤務実態が一定わかる資料が示されたり、討論の中での現場教員の発言で実感として示され語られたりしたのは貴重であった。発言にもあったが、今の教員の勤務実態はまさに「異常な」ものである。この実態の改善が、いじめなど子どもたちをめぐる様々な問題に取り組む際に欠かせないことであると再確認した。

③しかし、子どもへの思いはあっても、あま

りの忙しさの中で振り回され、余裕を失っている教員の心情はこの会場では必ずしも理解されたとは言えないのではないか。先日、私自身も知り合いの教員から、「忙しすぎて、子どものことを、特に一人ひとりの事を考えてあげられない自分が嫌だ。」という相談を受けた。「忙しいから」ということが言い訳にはならないことは十分承知しているが、“忙しさ”が教員をどのような状態に陥らせているのかを真剣に考え合いたいと思った。

④いじめ問題などをはじめとして、教員も保護者も地域も、子どもたちとどう向き合っているか改めて鋭く問われている。いじめの解決は、単に加害者を厳罰に処せば済むものではない。子どもの心に寄り添い、子どもたち自身が問題に取り組んでいこうとする姿勢をどう励ましていくのかを真剣に考えなければと思った。この点では、討論の中で出された、「『いじめのない学級』は無理だが、『いじめを許さない学級』なら作れる。」という発言を、それぞれがどのように受け止めるかが問われていると感じた。

⑤転落死事件そのものについては、当該校の教職員の中での論議が十分にはなされていないことが残念である。誠実な論議をぜひ期待したい。

⑥「安倍教育再生」の様々な施策は、子ども・教員・保護者・地域などをますます孤立させ、分断していくように思う。それに加えて、高校入試制度をはじめとする教育制度の問題を抜きにしては、今の学校・教育の問題を語れないことを改めて感じた。

⑦当該校だけでなく、自分たちの問題として教職員組合が独自に調査し議論を重ね、このシンポジウムを開き、今の学校・教育の問題点を論議する場を作ったことは、大変貴重な取り組みであったと考えている。今後も、このような取り組みを、諸団体と協力共同して積み重ねていきたい。